

〈原著論文〉

親準備性傾向が将来の虐待行為懸念におよぼす影響 ——女子大学生の場合——

The Influence of Readiness-for-Parenthood on Anxieties
about Abusing own's Child among Female Undergraduates

諸井克英 氏原愛深*
(Katsuhide MOROI) (Manami UJIHARA)

Abstract: The present study explored the relationship between readiness-for-parenthood cultivated by adolescence and anxieties about abusing their own's among female undergraduates. The Readiness-for-Parenthood Scale (Nishida & Moroi, 2010) and the Anxieties-about-Abusing-own's-Child Scale developed by the authors were administered to female undergraduates ($N=249$). The factor analysis (*maximum likelihood method, promax rotations*) of the Readiness-for-Parenthood Scale indicated four factors: Concern for the child and baby, positive expectancy of a parental role, father as a role model, and anxiety about parenting in the future. By the cluster analysis (*Ward's method, squared Euclidean distance*) for the Anxieties-about-Abusing-own's-Child Scale, four clusters appeared: Violence, indifference, neglect, and intimidation. The covariance structure analysis showed that, as predicted, readiness for parenthood inhibited anxieties about abusing own's child. The significance of the research was discussed from the point of view of motherhood.

Key words: child abuse, readiness-for-parenthood, apprehension for abusing their own child, parenthood, adolescence

I. 問題

2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」が制定された。しかしながら、現状では、児童相談所などへの児童虐待相談対応件数は増加し続け、虐待死亡事例も減少していない。2018年度の児童相談所での相談件数を見ると(厚生労働省, 2019a), 2012年度(66,701件)の2倍以上に増加している(159,850件)。とりわけ、虐待4カテゴリーのうち(厚生労働省, 2019b), 「身体的虐待」(2012年度 23,579件→2018年度 40,256件)と

「心理的虐待」(22,423件→88,389件)の増加が際立っている。所謂虐待死数(心中を除く)では、2016年度は49件であり、2012年度(51件)とほぼ変わらなかった(社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会, 2019)。このような状況で、親の子どもへの体罰禁止を明示した改正児童虐待防止法が2019年6月に国会で成立した(2020年4月施行)。

ところで、児童虐待相談件数から見ると、虐待者の大半は実母あるいは実父である(厚生労働省, 2018)。興味深いことに、元々は実母虐待者の割合が多いが、近年、実父虐待者が増加している(実母: 2013年度 54.3%, 2017年度 46.9%/実父: 31.9%, 40.7%)。このような実親による虐待は、「母性崩壊」概念など女性の側

同志社女子大学生生活科学部人間生活学科特任教授
*人間生活学科 2018年度卒業

の資質変化に原因を求める言説と対応する。しかし、実父虐待者の増加は、大日向(1991)による脱価値概念としての「育児性」概念の正当性を示唆する。この考えに沿って従来の母性研究を科学的に捉え直す作業が行われた。その中で、次のように定義される親準備性概念(あるいは類似概念)が提唱された(岡本・古賀, 2004; 「子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態」)。

諸井・森・板垣(2016)は、「虐待の世代間伝達現象」(鶴飼, 2000; 「母親が子どもに行使した虐待が子どもが親世代になりその子どもへの虐待と反復される」という考えに基づき、親準備性を中核概念として「虐待相当行為の再生産過程」モデルを提起した(諸井ら, 2016; 図1)。このモデルの「被虐待相当行為の経験→青年期における親準備性傾向の育み不全」の部分が女子大学生を対象に検討された。回答者に小学校に入学する前の頃(幼稚園や保育園の頃)から小学校1~3年までの頃に限定して被虐待相当経験を想起させた。クラスター分析によって得られた被虐待相当経験の7側面と親準備性との関係を共分散構造分析によって検討した(観測変数の構造方程式)。その結果、《間接的虐待》3側面(「言語攻撃」, 「社会的放置」, 「無視」)が親準備性傾向の醸成に否定的影響をもたらし、《直接的虐待》である「暴力」経験が「モデルとしての父親」を促進することが明らかになった。

本研究の目的は、前述した「虐待相当行為の再生産過程」モデル(諸井ら, 2016; 図1)の後半の部分、つまり、「青年期における親準備性傾向の育み不全→虐待相当行為の行使可能性」の部分を実証的に検討することである。本研究で設定した仮説は以下の通りである。親準備性の側面や虐待相当行為の側面ごとの仮説は設けなかった。

仮説: 親準備性傾向が十分に育んでいない者は、将来自分が親になった時に子どもに虐待相当行為を犯す懸念を抱いているだろう。

この仮説を検証するために、前研究(諸井, 2016)と同様に女子大学生を対象とした質問紙調査を行った。

II. 方法

調査対象および調査の実施

京都府内に位置する女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した(2018年5月14

日・17日・24日)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生249名を分析対象とした(2回生159名, 3回生81名, 4回生9名)。回答者の平均年齢は19.63歳($SD = .76$, 19~24歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、a) 親準備性傾向尺度、b) 卒業後進路や結婚希望に関する設問(本稿では省略)、およびc) 将来の虐待行為懸念尺度から構成されている。

1. 親準備性傾向尺度

西田・諸井(2010)による親準備性傾向尺度を利用して、回答者の親準備性傾向を測定した。後続研究でもこの尺度を使用した(諸井ら, 2013; 2016)、研究間で若干の因子構造の差異が認められた(ともに女子大学生対象; 西田・諸井〈子どもに対する関心、将来の子育てに対する不安、モデルとしての父親、親役割に対する積極的期待、子どもに対する無条件の肯定、モデルとしての母親〉, 諸井ら〈子どもへの関心、モデルとしての親(あるいは父親)、将来の子育て不安、親役割への積極的期待〉)。

原研究と同様に、6ヵ月間の回答者の生活を思い浮かべさせ、60項目(西田・諸井, 2010参照)それぞれがあてはまる程度を4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

2. 将来の虐待行為懸念尺度

本研究では、回答者が母親になった時に子どもに虐待相当行為を行う可能性を測定した。子どもが「小学校に入学する前(幼稚園や保育園の頃)」から「小学校1年から3年までの頃」であると想像させ、子どもにどのように接するかを推測させた。諸井ら(2016)は虐待行動に焦点をあてた先行諸研究で用いられた虐待項目を整理し55項目を作成した。本研究では、受動表現であるこれらの項目を能動表現に修正し、将来の虐待行為懸念項目とした(Appendix 1参照)。

回答者に子どもが「小学校に入学する前(幼稚園や保育園の頃)」から「小学校1年から3年までの頃」を想像させ、55項目の行為を回答者が行う可能性を4点尺度で推測させた(「4. ひんぱんにあると思う」, 「3. どちらかといえばあると思う」, 「2. どちらかといえばないと思う」, 「1. まったくないと思う」)。

なお、以上の2尺度それぞれでの評定順の効果を相殺

親準備性傾向が将来の虐待行為懸念におよぼす影響

するために、尺度ごとに評定用紙を頁単位（親準備性傾向尺度7頁；将来の虐待行為経験尺度6頁）で無作為に並び替えた。

Ⅲ. 結果

親準備性傾向

1. 項目水準の検討

60項目について以下のように項目水準での検討を行った。項目平均値 ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD \geq .60$) のチェックをしたところ、11項目が不適切であった ($m > 3.5$: read_d_8, read_e_9; $m \leq 3.5$: read_c_3, read_d_6, read_f_6, read_g_2; $m \leq 1.5$: read_c_2, read_e_8 / $SD < .60$: read_b_2, read_c_1, read_d_5; $SD < .60$ [平均値チェックと重複]: read_d_8, read_e_9, read_g_2)。

2. 因子分析

項目水準の検討で不適切であった11項目を除き、因子分析（最尤法、プロマックス回転 $k=3$ ）を行った。まず、初期共通推定値を確認したが、この値が低い項目 ($< .25$) はなかった。49項目を対象に、初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解を求め適切な解を探索した。その際、a) 特定因子への負荷量が十分に大きく（絶対値 $\geq .40$ ）、b) 他因子への負荷が小さい（絶対値 $< .40$ ）と

いう基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ絶対値 .40以上の負荷量を示すように、項目を削除しながら、a) と b) の基準を充たすまで分析を反復した。算出可能であった2~12因子解を検討したが、4因子解が最も適切であった（表1）。先行研究（西田・諸井, 2010；諸井ら, 2013；諸井ら, 2016）を参考に各因子を以下のように命名した。「Ⅰ. 子どもへの関心」、「Ⅱ. 親役割への積極的期待」、「Ⅲ. モデルとしての父親」、「Ⅳ. 将来の子育て不安」。

3. 下位尺度の構成

各因子への負荷量の絶対値が .400 を上回る項目を選抜き（表1）、下位尺度を構成した。4つの下位尺度それぞれで検討を行った。あらかじめ逆転項目の調整を行い、以下の2通りの分析を試みた。a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値の算出、b) Cronbach の α 係数値の算出。4下位尺度すべてで適切な結果が得られた。そこで、下位尺度項目の合計得点を項目数で割った値を下位尺度得点とした（表2）。

反復測定分散分析によって4得点の平均値比較を行ったところ、有意な効果が検出された。下位比較によると、「Ⅱ. 親役割への積極的期待 > Ⅰ. モデルとしての父親 \equiv Ⅲ. 子供への関心 \equiv Ⅳ. 将来の子育て不安」の有意な傾向が得られた。得点分布を吟味すると、いずれも正規性分布からの有意な高得点方向への逸脱が認められ

表1 親準備性尺度に関する因子分析（最尤法、プロマックス回転 $k=3$ ）の結果一回転後の因子負荷量一

	(a)	(b)		(a)	(b)		
Ⅰ. 子どもへの関心	[$r = .48-.85, \alpha = .94$]		Ⅱ. 親役割への積極的期待	[$r = .35-.82, \alpha = .89$]			
read_b_5 私は、子どもをあまり好きではない。	* 関	-.86	read_a_9 私は、子どもを育て、良い親になろうと思っている。	残	.80		
read_a_4 私は、小さな子どもに関心がある。	関	.81	read_g_6 私も親となって、子どもを育てたい。	残	.78		
read_b_9 私は、小さい子どもの相手が苦手である。	* 関	-.80	read_e_5 私は、将来、自分が親になることなんて考えたこともない。	* 積	-.76		
read_a_6 私は、子どもが遊んでいるのを見るのは面白いと感じる。	関	.71	read_d_9 私は、将来、親になった時のことを想像することがある。	積	.76		
read_b_7 私は、幼い子どもの瞳にひきつけられる。	関	.68	read_e_3 私は、将来、自分が育児を楽しんでいる自分の姿を想像することがある。	積	.66		
read_a_8 私は、テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る。	関	.68	read_b_1 私は、将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想像する。	積	.63		
read_g_5 私は、小さな子どもの世話をしたり、遊んだりするのは面倒である。	* 関	-.67	read_d_7 私は、母親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい。	母	.47		
read_a_3 私は、幼児の姿をついで目で見ていることがある。	関	.66	read_f_5 私は、自分の母親のようになりたい。	母	.43		
read_c_9 私は、保育所や幼稚園の前を通りかかると、中をのぞきたくなる。	関	.66	read_g_3 私は、子どものすべてを受け入れるべきである。	無	.42		
read_e_5 私は、赤ん坊の泣き声を聞くといライラすることがある。	* 不	-.63	read_e_6 私は、子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う。	残	.42		
read_c_6 私は、小学生の遊び相手になれそうである。	関	.63	Ⅳ. 将来の子育て不安	[$r = .53-.67, \alpha = .81$]			
read_a_1 私は、幼い子どもが泣いていると、何とかしたいと思う。	関	.62	read_b_6 私は、将来、子育てに疲れ果て、イライラしている自分を想像する。	不	.74		
read_a_2 私は、遊んでいる子どもの歓声をうらさいとを感じる。	* 関	-.61	read_f_2 私は、将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する。	不	.74		
read_f_3 私は、将来、子どもを扱う職業につきたいと思うことがある。	関	.55	read_d_1 私は、将来、泣く赤ちゃんを前にして、途方に暮れている自分を想像することがある。	不	.72		
read_c_4 私は、小さい子どもに頼られると嬉しい。	残	.54	read_d_4 私は、将来、子どもをうまく育てられるかどうか不安である。	不	.61		
read_b_4 私は、幼児の相手をうまくやれると思う。	関	.49	read_b_3 私は、子どものこころの動きに興味がある。	関	.42		
Ⅲ. モデルとしての父親	[$r = .61-.77, \alpha = .87$]			Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
read_f_7 私は、自分の父親のようになりたい。	父	.86		Ⅰ	.60	.13	-.23
read_e_7 私は、父親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい。	父	.84	[因子相関]	Ⅱ	***	.17	-.12
read_f_4 私は、父親について良い思い出がない。	* 父	-.80		Ⅲ	***	***	-.08
read_g_4 私は、父親が自分にくれたことをいろいろ思い出す。	父	.62					

N = 249

適合度検定: $\chi^2(40) = 1036.73, p = .001$

初期因子固有値 ≥ 2.28 ; 初期説明率 57.79%

(a) : 西田・諸井 (2010) との対応 (Ⅰ. 子どもに対する関心; Ⅱ. 将来の子育てに対する不安; Ⅲ. モデルとしての父親; Ⅳ. 親役割に対する積極的期待; Ⅴ. 子どもに対する無条件の肯定; モデルとしての母親; 残余項目)

(b) : 当該因子負荷量

* : 逆転項目

表2 各尺度における下位尺度得点の検討

	平均値	**	標準偏差	分布の正規性検定
〔親準備性傾向〕				
I. 子どもへの関心	2.85	b	0.66	0.07, $p = .003$
II. 親役割への積極的期待	3.09	a	0.64	0.11, $p = .001$
III. モデルとしての父親	2.85	b	0.82	0.13, $p = .001$
IV. 将来の子育て不安	2.73	b	0.68	0.10, $p = .001$
〔反復測定分散分析〕			$F_{(2.41, 597.81)} = 13.01^*$	$p = .001$
〔将来の虐待行為懸念〕				
I. 暴力	0.13	d	0.23	0.32, $p = .001$
II. 社会的放置	0.19	c	0.30	0.36, $p = .001$
III. 無視	0.28	b	0.29	0.19, $p = .001$
IV. 威嚇	0.39	a	0.39	0.25, $p = .001$
〔反復測定分散分析〕			$F_{(2.32, 575.59)} = 81.88^*$	$p = .001$

$N = 469$

*Greenhouse-Geisser の検定

**異なる英文字は有意に異なることを表す ($p < .05$, Bonferroni の方法)

分布の正規性検定: Kolmogorov-Smirnov の検定に対する Lilliefors の修正値

た。

将来の虐待行為懸念

1. 各項目に対する回答値の調整

将来の虐待行為懸念 55 項目の平均値と標準偏差を検討した (Appendix 1 参照)。健全サンプルを対象としているので当然であるが、1 項目のみで平均値が有意に 1.5 を上回った (event_f_7)。次に、55 項目の回答分布を吟味したところ、回答カテゴリ分布に大きな偏りが認められた。そこで、全研究と同様に (諸井ら, 2016)、2 値変量として扱うことにした。

まず、回答者の 90% 以上の者 ($N \geq 224$) が「1. まったくないと思う」と回答した 21 項目を削除した (event_a_2, event_a_3, event_a_6, event_a_8, event_b_4, event_b_8, event_b_9, event_c_2, event_c_3, event_c_7, event_c_8, event_c_9, event_d_3, event_d_4, event_d_6, event_e_4, event_e_7, event_f_2, event_f_3, event_f_5, event_f_10)。

次に残りの 34 項目について、元の 4 点尺度を 2 点尺度 (「4. ひんぱんにあると思う」, 「3. どちらかといえばあると思う」, 「2. どちらかといえばないと思う」 \Rightarrow 「1=虐待する」; 「1. まったくないと思う」 \Rightarrow 「0=虐待しない」)へと変換した。

2. クラスタ分析

上記のようにして 2 点尺度化した 34 項目を対象に、クラスタ分析を行った。Ward 法により、2 値データの平方ユークリッド距離に基づく測定変数の分類を試みた。クラスタ内の他項目と不整合な項目や構成クラス

ター自体の意味が不明確である項目を除き分析を繰り返した。3 回目の分析で、構成項目が一貫した解が得られた (図 1)。構成項目の意味を勘案して、各クラスターを「I. 暴力」, 「II. 社会的放置」, 「III. 無視」, 「IV. 威嚇」とした。

次に、4 クラスターの構成項目を下位尺度項目と見なし、以下の 2 通りの分析を行った (表 3)。a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値の算出、b) Spearman-Brown の ρ 係数値の算出。「IV. 威嚇」で ρ が若干低かったが、全体として 4 下位尺度は適切と判断した。

下位尺度項目の合計得点を項目数で割った値を下位尺度得点とした (表 2)。反復測定分散分析を用いて 4 得点の比較を行うと、有意な主効果が認められ、「IV. 威嚇 > III. 無視 > II. 社会的放置 > I. 暴力」の有意な傾向があった。

親準備性傾向と将来の虐待行為懸念との関連

以上の分析で得られた得点相互の関連を検討するために、ピアソン相関分析と共分散構造分析を行った。

1. ピアソン相関分析

親準備性傾向と将来の虐待行為懸念に関する各 4 得点の間のピアソン相関値を求めた (Appendix 2)。「III. モデルとしての父親」は将来の虐待行為懸念 4 得点のいずれとも無関係であり、「IV. 威嚇」は「IV. 将来の子育て不安」とのみ有意な関係があった。他の組み合わせで有意な値が得られた。顕著に高い相関傾向は見られなかった ($-.28 < r < +.17$)。

親準備性傾向が将来の虐待行為懸念におよぼす影響

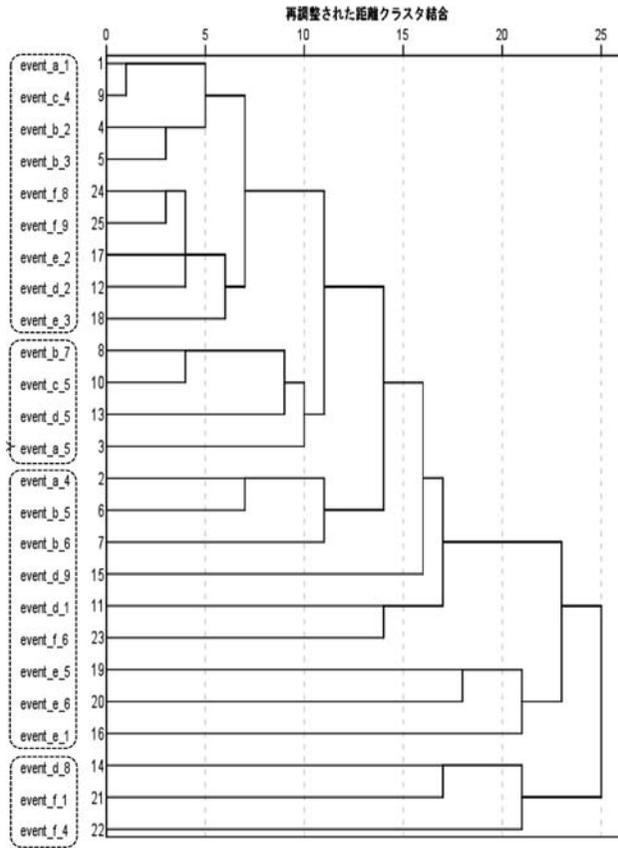


図1 将来の虐待行為懸念に関するクラスター分析 (Ward 法, ユークリッド平方距離) の結果-3 回目-

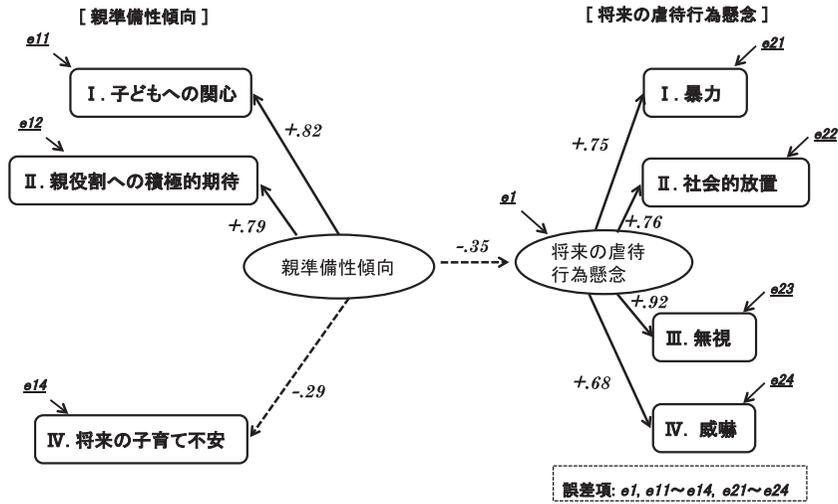
表3 将来の虐待行為懸念に関する下位尺度の検討

	r^*		r^*
〔I. 暴力〕		〔III. 無視〕	
event_a_1 何か物を投げつける。	.65	event_a_4 長時間にわたって無視する。	.51
event_c_4 家の外やベランダに閉め出す。	.55	event_b_5 長時間にわたって言葉をかけない。	.55
event_b_2 何か物で叩く。	.54	event_b_6 泣いても無視する。	.61
event_b_3 怪我をさせる。	.49	event_d_9 外出を過度に制限する。	.54
event_f_8 ところが傷つくことを繰り返し言う。	.62	event_d_1 他のきょうだいの方を可愛がる。	.62
event_f_9 痛い目に合わせると言う。	.62	event_f_6 世話が面倒だと言う。	.51
event_e_2 殴る。	.59	event_e_5 着替えを手伝わない。	.55
event_d_2 突き飛ばす。	.56	event_e_6 体の調子が悪くても幼稚園・保育園に行かせる。	.56
event_e_3 長時間にわたって立たせる。	.57	event_e_1 恥をかかす。	.40
	$SB = .83$		$SB = .74$
〔II. 社会的放置〕		〔IV. 威嚇〕	
event_b_7 幼稚園・保育園や小学校のことに関心を示さない。	.62	event_d_8 八つ当たりをする。	.52
event_c_5 学校のことに関心をもちない。	.64	event_f_1 一方的に自分の意見に従うように強要する。	.55
event_d_5 黙ってどこかに用を足しに行く。	.53	event_f_4 大声で怒鳴る。	.50
event_a_5 いつも夕食を一人で食べさせる。	.53		
	$SB = .77$		$SB = .69$

N = 249

*当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値

SB: Spearman-Brown の信頼性係数



矢印: 標準化パス係数[すべて $p < .001$]

適合度: $\chi^2_{(13)} = 22.07, p = .054, GFI = .98, AGFI = .95, RMSEA = .054$

図2 親準備性傾向が将来の虐待行為懸念におよぼす影響

— 共分散構造分析 (Amos 25.0, 最尤推定法) による因果分析 (N = 249) —

2. 共分散構造分析

Amos 25.0.0 を利用して因果分析を行った (最尤推定法)。以下の様に設定した多重指標モデル (豊田, 2007) を検討した。潜在変数として [親準備性傾向] と [将来の虐待行為懸念] を設定し, 「Ⅲ. モデルとしての父親」を除く親準備性傾向 3 得点と将来の虐待行為懸念 4 得点を観測変数として用い, それぞれの潜在概念からの影響を仮定した。また, [親準備性傾向] から [将来の虐待行為懸念] への影響経路を設けた。

このモデルに対して分析を行うと, すべてのパスが有意となり, 十分な適合度が示された (図2)。相関分析では将来の虐待行為懸念 4 得点と有意な関係が見られなかった「Ⅲ. モデルとしての父親」を追加した分析を行うと若干適合度が減少したが ($GFI = .97, AGFI = .95, RMSEA = .04$), 設定したパスはすべて有意であった。本研究では, 相関分析を考慮して, 「Ⅲ. モデルとしての父親」を含まないモデルを採用することにした。なお, 前研究 (諸井, 2016) では観測変数の構造方程式を用いた。本研究でも観測変数の構造方程式による分析を試みたが, 適合度が不十分だった ($GFI < .80$)。

IV. 考察

前研究 (諸井ら, 2016) では, 発達初期段階で経験し

た被虐待相当行為が青年期段階で醸成されている親準備性傾向におよぼす影響が検討された。本研究の目的は, 前研究で設定した「虐待相当行為の再生産過程」モデル (諸井ら, 2016; 図1) の後半部分の検討であった。このために, 女子大学生を対象とした質問紙調査を行った。

共分散構造分析 (多重指標モデル) によれば, 親準備性傾向が将来の虐待行為懸念に影響することを示すモデルが支持された (図2)。興味深いことに, 親準備性傾向の「モデルとしての父親」を含まないほうが, モデルとしての適合度が向上した。前研究では (諸井ら, 2016), 「言語攻撃」, 「社会的放置」, 「暴力」という被虐待相当経験が親準備性傾向の「モデルとしての父親」の側面に否定的影響をもたらしていた。しかし, 今回の結果では, 「モデルとしての父親」の高まりは, 単純相関の上でも将来の虐待行為懸念 4 側面と無関係であった (Appendix 2)。これは, 回答者が女子青年であることによると思われる。つまり, 父親的役割を理想とすることと自分の性別との間に乖離が生じ, 親として子どもに肯定的に接する (将来の虐待行為懸念の低下) ことと単純に結びつかないのかもしれない。

前研究 (諸井ら, 2016) と本研究は, 「虐待相当行為の再生産過程」モデルを片側ごとに検討した。今後は, これを全体として検討する必要がある。また, 本研究

では回答者を女子大学生に設定したために、回答者自身が子どもをもったと想定させて虐待可能性を評定させた。実際に親の立場にある回答者を対象としてモデルを検討する必要がある。

ところで、近年、周産期医療の中でボンディング障害が重要視されている。ボンディング障害とは、「自分の子どもに対して愛情がわかず、世話をし守りたいという感情が弱く、かえってイライラしたり、敵意を感じたり、攻撃したくなるなどの唱導が出てくるような病的な心理状態」(篠原, 2019)を指す。この概念は、本研究での中核概念である親準備性傾向との類似概念といえる。ボンディング障害が胎児期・新生児期・乳児期にある子どもに対する親の態度・行動傾向の問題として提起されたのに対して、親準備性傾向の場合には子どもの年齢範囲は限定されない。さらに、母親が抱えるボンディング障害は産後間もない新生児への虐待行動の規定因であることが明らかにされている(馬場, 2019)。さらにはこの障害を父親側が患っている場合にも、父親による虐待行動の発生につながっていた(馬場, 2019)。

したがって、親の被虐待経験がボンディング障害を喚起する可能性も含めると(北山, 2019)、本研究と前研究(諸井ら, 2016)で前提とした「虐待相当行為の再生産過程」モデル(諸井ら, 2016; 図1)の枠組みとボンディング障害の研究枠組みは重なることになる。したがって、今後は、周産期医療の枠組みで重要視されているボンディング障害と本研究で扱っている親準備性傾向との関連を検討する必要がある。

本研究の中核概念である親準備性傾向は、母親あるいは父親とその子どもという2者関係の枠組みの中で生じる態度・行動である。先述したボンディング概念も同様である。ところで育児領域で注目される対人関係として「ママ友」つまり「子どもを通じて知り合った仲間」の存在がある。主として育児期の友だち関係である「ママ友」は、一般的な友だち関係に似ているが、次の点で特徴的な対人関係といえる。「母親同士の感情だけで友人関係の強弱を規定できるものではなく、母親とペアで構築している子どもの同士の存在を介した間接的な関係」(大嶽, 2014)という、複合的な関係なのである。この「ママ友」は育児において肯定的な機能ももつが、ストレスを惹起する原因ともなる(三宮, 2012)。「ママ友」の対人関係を調べた宮木(2004)によれば、未就学児をもつ母親のほぼ7割が携帯電話機を用いたメール交換や通話を営んでいた。一般的な友だち関係と同様に「ママ友」関係は対面的接触に限定されない交流に拡大され

た。さらに、スマートフォンの普及(2010年9.7%、2017年75.1; 総務省, 2018)とともにLINEなどの利用による「24時間つながるママ友」関係が生じた。これは、いわゆる「公園デビュー」のしんどさを遙かに上回るストレスをもたらすことになった(山口・小林, 2014)。

このように育児期の母親は、ストレスを発生される可能性をもつ「ママ友」のような複合的な関係に埋め込まれている。この「ママ友」の問題は、親準備性傾向やボンディング障害などの傾性的特徴だけでなく、当事者が営んでいる対人関係の特徴も視野に入れて(夫婦間の虐待行為など; 諸井 2003 参照)、子どもに対する虐待相当行為発生のメカニズムを検討すべきことを示唆している。

〈付記〉

- (1) 本報告は、第2著者が第1著者の下で卒業研究(人間生活学科2018年度卒業論文)のために立案・実施した研究に基づいている。ここでは収集したデータを再分析した。
- (2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 25 for Windows と Amos 25.0.0 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- 馬場香里 2019 周産期ボンディング障害と新生児虐待 北村俊則(編)『周産期ボンディングとボンディング障害—子どもを愛せない親たち—』ミネルヴァ書房 53-77頁
- 北村俊則 2019 周産期ボンディング障害の発生要因 北村俊則(編)『周産期ボンディングとボンディング障害—子どもを愛せない親たち—』ミネルヴァ書房 31-39頁
- 宮木由貴子 2004 「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割—ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係— *Life Design REPORT* (第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部), 159, 4-15.
- 諸井克英 2003 『夫婦関係学への誘い—揺れ動く夫婦関係—』ナカニシヤ出版
- 諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美 2013 親との接触経験が親準備性傾向の形成におよぼす影響 学術研究年報(同志社女子大学), 64, 71-81.
- 諸井克英・森奈保子・板垣美穂 2016 被虐待相当行為経験が親準備性傾向におよぼす影響—女子大学

- 生の場合－ 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **33**, 162-174.
- 西田郁美・諸井克英 2010 親準備性傾向尺度の作成生活科学 (同志社女子大学), **44**, 39-44.
- 岡本祐子・古賀真紀子 2004 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, **4**, 159-172.
- 大日向雅美 1991 「母性／父性」から「育児性」へ原ひろ子・館かおる (編) 『母性から次世代育成力へ－産み育てる社会のために－』新曜社, 205-229 頁
- 大嶽さと子 2014 「ママ友」関係に関する研究の概観 名古屋女子大学紀要 (人文社会編), **60**, 37-43.
- 三宮千賀子 2012 なんでこんなにストレスになるの!!－モメるママ友, 頼れるママ友－ *AERA*, **25(53)**, 27-29.
- 篠原枝里子 2019 周産期ボンディングの概念 北村俊則 (編) 『周産期ボンディングとボンディング障害－子どもを愛せない親たち－』ミネルヴァ書房 1-11 頁
- 豊田秀樹 2007 『共分散構造分析 [Amos 編]』東京図書
- 山口亜祐子・小林明子 2014 公園デビューよりしんどい SNS が生むママ友ストレス *AERA*, **27(38)**, 53-55.
- [インターネット・サイト]
- 厚生労働省 2018 『平成 29 年度福祉行政報告例の概況』 | https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/17/dl/kekka_gaiyo.pdf
- 厚生労働省 2019 a 『平成 30 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値)』 | <https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000533886.pdf>
- 厚生労働省 2019 b 『児童虐待の定義と現状』 | https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/about.html
- 総務省 2018 『情報通信白書平成 30 年版』 | <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd252110.html>
- 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会 2019 『子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について－第 14 次報告－』 | <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000362705.pdf>
- 東京新聞 2019 改正虐待防止法成立－「親の体罰禁止」「児相介入強化」－ | <https://www.tokyo-np.co.jp/article/politics/list/201906/CK2019061902000295.html>

(2019 年 10 月 1 日受理)
(2019 年 11 月 5 日採択)

親準備性傾向が将来の虐待行為懸念におよぼす影響

Appendix 1 将来の虐待行為懸念尺度項目に関する頻度分布

	1. まったく ないと思う	2. どちらか といえ ばある と思う	3. どちらか といえ ばある と思う	4. ひんぱん にある と思う	平均値	SD
event_a_1 何か物を投げつける。	219	25	5		1.14	.40
event_a_2 蹴る。	226	19	4		1.11	.36
event_a_3 髪の毛を引っ張る。	231	14	4		1.09	.34
event_a_4 長時間にわたって無視する。	203	35	10	1	1.23	.53
event_a_5 いつも夕食を一人で食べさせる。	200	47	2		1.20	.42
event_a_6 病気になっても医者になかなか連れていかない。	237	12			1.05	.22
event_a_7 体の露出度の高い服を着せる。	221	27	1		1.12	.33
event_a_8 「あんたなんか生まれてこなければ良かった」と言う。	243	6			1.02	.15
event_a_9 年齢不相応な早期教育を強要する。	214	33	2		1.15	.38
event_b_1 親に嫌われていると感じさせる。	212	35	2		1.16	.39
event_b_2 何か物で叩く。	215	31	3		1.15	.39
event_b_3 怪我をさせる。	223	25	1		1.11	.32
event_b_4 押し入れや部屋などに閉じ込める。	225	22	2		1.10	.33
event_b_5 長時間にわたって言葉をかけない。	193	48	8		1.26	.51
event_b_6 泣いても無視する。	173	60	15	1	1.37	.62
event_b_7 幼稚園・保育園や小学校のことに関心を示さない。	206	40	2	1	1.19	.44
event_b_8 セックスの話を聞く。	224	25			1.10	.30
event_b_9 かわいくない顔だと言う。	232	15	2		1.08	.30
event_c_1 大事にしていたおもちゃを勝手に捨てる。	193	52	4		1.24	.47
event_c_2 火を近づけて脅かす。	242	7			1.03	.17
event_c_3 暴力をふるう。	227	19	3		1.10	.34
event_c_4 家の外やベランダに閉め出す。	218	27	4		1.14	.39
event_c_5 学校のことに関心をもたない。	206	41	2		1.18	.41
event_c_6 友だちが悪いことをしていても注意しない。	149	88	12		1.45	.59
event_c_7 大怪我をしても医者のところ連れていかない。	242	7			1.03	.17
event_c_8 ポルノを見せる。	241	8			1.03	.18
event_c_9 「お前はダメだ」と繰り返し言う。	224	25			1.10	.30
event_d_1 他のきょうだいの方を可愛がる。	178	60	10	1	1.33	.57
event_d_2 突き飛ばす。	220	26	2	1	1.13	.40
event_d_3 食事を与えない。	241	8			1.03	.18
event_d_4 家に入れない。	233	16			1.06	.25
event_d_5 黙ってどこかに用を足しに行く。	199	42	5	3	1.24	.55
event_d_6 友だちが刃物で遊んでいるのに止めない。	242	6		1	1.04	.24
event_d_7 放っておかれていると感じさせる。	200	40	8	1	1.24	.52
event_d_8 八つ当たりをする。	158	69	22		1.45	.65
event_d_9 外出を過度に制限する。	189	56	4		1.26	.47
event_e_1 恥をかかす。	166	66	15	2	1.41	.64
event_e_2 殴る。	221	25	3		1.12	.37
event_e_3 長時間にわたって立たせる。	214	34	1		1.14	.36
event_e_4 裸同然の薄着で外に出す。	232	15	2		1.08	.30
event_e_5 着替えを手伝わない。	161	68	19	1	1.44	.65
event_e_6 体の調子が悪くても幼稚園・保育園に行かせる。	162	75	12		1.40	.58
event_e_7 衣服の洗濯をしない。	234	14	1		1.06	.26
event_e_8 ほんの些細なことで、ひどくしかる。	186	57	5	1	1.28	.52
event_e_9 長時間にわたって勉強を強制する。	189	54	5	1	1.27	.51
event_f_1 一方的に自分の意見に従うように強要する。	160	72	16	1	1.43	.63
event_f_2 首を絞めるふりをする。	243	6			1.02	.15
event_f_3 長時間にわたって正座させる。	231	17	1		1.08	.28
event_f_4 大声で怒鳴る。	136	84	29		1.57	.69
event_f_5 車の中に長時間にわたって放置する。	241	8			1.03	.18
event_f_6 世話が面倒だと言う。	180	54	13	2	1.35	.62
event_f_7 子どもの体に異常に関心をもつ。	152	36	35	26	1.74	1.05
event_f_8 ところが傷つくことを繰り返し言う。	210	34	5		1.18	.43
event_f_9 痛い目に合わせると言う。	217	26	6		1.15	.42
event_f_10 親が望んでいない子だと感じさせる。	237	11	1		1.05	.24

N = 249

SD : 標準偏差値

■ : 「1」に該当する者 ≥ 224 名 (90% 以上)

□ の項目 : 「2」「3」「4」を合併

Appendix 2 親準備性傾向と将来の虐待行為懸念との関係ーピアソン相関値ー

[親準備性傾向]	[将来の虐待行為懸念]			
	I. 暴力	II. 社会的放置	III. 無視	IV. 威嚇
I. 子どもへの関心	-.17 b	-.28 a	-.24 a	-.10
II. 親役割への積極的期待	-.20 a	-.28 a	-.28 a	-.09
III. モデルとしての父親	-.06	-.07	-.10	-.03
IV. 将来の子育て不安	.13 c	.15 c	.17 b	.16 c

N = 249

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$